

ART KISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2008.冬号] **vol.40**



「荒木経惟 熊本ララバイ」スタート!

11月1日に「荒木経惟 熊本ララバイ」展が開幕しました。本展のために赤ちゃんと母親を熊本で撮影した《母子像》約40点と、その母子へのオマージュとして新しく撮られた花のシリーズ《色淫花》を中心に、過去の代表作から初公開となる新作までを一挙に展示します。アラキーの全貌を知る貴重な機会をお見逃しなく!(A.A)

いよいよ「荒木経惟 熊本ララバイ」展がスタート！

11月1日、ついに「荒木経惟 熊本ララバイ」展が始まりました。(～2009年2月15日まで)
 本展のために2007年以降に生まれた赤ちゃんとお母さんを熊本で撮り下ろした《母子像》約40点、その母子へのオマージュとして撮影された点数もサイズも同じ新作の花シリーズ《色淫花》、初公開となる《日記》の最新作に加えて、これまでの代表作など6千点余りを展示しています。また、アラキーが審査員を務めた2006年の「熊本アートパレード」の様子と《母子像》の撮影風景を記録したドキュメンタリー映像《熊本元気》も上映しています。
 開幕前日の10月31日に開会式が行われました。《母子像》に撮影参加していただいたお母さんと赤ちゃんも多数出席し、12月21日に行う「アラキーの子育て相談室」のゲストである歌手の坂本スミ子さんも駆け付けてくださいました。《母子像》が撮影された6月にはお母さんに抱っこされていた赤ちゃんも、楽しそうに会場内を歩いており、すくすくと育つ、いのちの尊さを実感する開会式となりました。
 11月1日のアーティスト・トークでは、アラキー自身が会場内を案内するギャラリー・ツアーを行いました。多くの来場者の方々に囲まれて、荒木さんのトークもますますヒートアップ。また、当日は、出品作品《柿右衛門さんへ》の共同制作者でもある、人間国宝第14代酒伊田柿右衛門さんもお越しくださいました。こちらの作品は、柿右衛門窯の磁器に荒木さんが絵付けをした初公開の陶磁器作品になります。12月21日に開催の「アラキーの子育て相談室」では再び荒木さんが登場予定。そこでは、子育て相談を交えながら子供にまつわるお話を伺います。こちらもお楽しみに！(A.A)



高森風鎮祭の審査 2008.8.18

今年も阿蘇の高森風鎮祭の造りもの審査を行いました。2004年の生人形と松本喜三郎展において、造りものを出品していただいた以来のお付き合いです。高森の「造りもの」は、日用品をつかって、さまざまのを見立て、わずか数日で造りあげ、お披露目をするので解体されます。今年は史上初の特賞同点2組をはじめ、力作ぞろいのなか、熊本市現代美術館賞は、盆提灯を効果的に用いた下町5組の「風神」に贈呈させていただきました。技術と想いが受け継がれていく安心感とともに、時代をとらえた感性に刺激された一日でした。(Y.H)



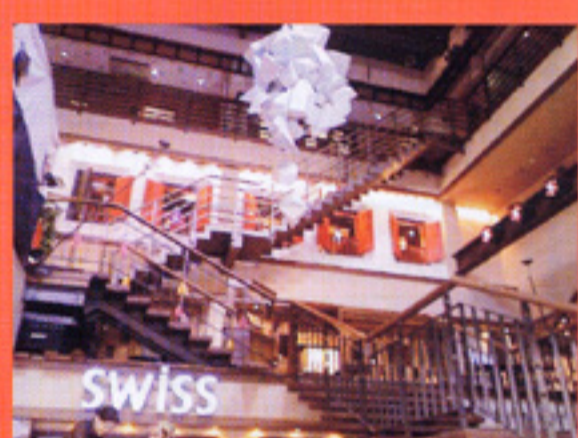
階段ギャラリー展示:夏の清流 熊本市立東町中学校 美術部作品展 2008.10.2-17

階段ギャラリーにおいて、熊本市立東町中学校美術部の生徒34名による作品展を開催しました。毎年7月に取材旅行へ行くという美術部の生徒さん、今年は川を描くために菊池渓谷へ行きました。「夏の清流」をテーマに、アクリル絵の具を使い、菊池渓谷の美しい自然を見事に描きだしていました。作品の搬入から、展示作業まで、生徒さん全員がブドウで頑張りました。(N.I)



SECOND SIGHT(セカンドサイト)でHIGO BY HIBINO展の石垣が展示されています 2008.9.9

「日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」期間中に作り上げたダンボールの石垣が、9月9日に展示終了後初めて出張展示されました。これは、日比野展のイベントで明日朝顔を育てるなど、同展での様々な事業に参画いただきご尽力を賜った、紅蘭亭グループの葉山さんとお話から、展示が実現しました。場所は、花畑町にある、飲食物店、カラオケ店、花屋やケーキ屋が複合しているお洒落な建物のSECOND SIGHTです。
 石垣の石たちは、再び武者返しとして積まれるのか・・・?と想像していたところ、「吊り下げてみよう」という新たな提案から、石がブドウはたまたシャネルリアのように、タコ糸で連結された状態で天井から吊り下げられ、HIGO BY HIBINO展の時の石とはまた違った、幻想的な雰囲気でも存在していました。
 9月14日に行われた熊本青年会議所主催のヒビノカップのため来熊した日比野克彦さんも、吊り下げられた石を見上げて、「いいね。」と感想を述べられました。8月30日は日比野さんの誕生日で、これは、日比野展でつながりのできた商店街の人たちから、日比野さんへの誕生日プレゼントでもあったのです。(M.H)



中学校の社会体験学習「ナイストライ」 京陵中学校:2008.9.10-11/桜木中学校2008.9.17-19

熊本市現代美術館は、これまで、中学生や高校生による職場体験学習生の受け入れを毎年行ってきました。今回は熊本市立京陵中学校2年生3名と熊本市立桜木中学校2年生4名がそれぞれ2日間と3日間、美術館のお仕事にトライしてくれました。体験学習は美術館の清掃作業や、受付でのお客様の対応、展覧会の会場内での監視員業務、事務室でのチラシ発送作業のお手伝い、さらには玄関前の花壇の草むしりなど、多岐にわたりました。最初はとても緊張していた7名でしたが、お客様や美術館スタッフと接していくうちに徐々に緊張がほぐれ、笑顔で仕事に挑んでくれました。最後の感想には「日頃できない体験ができてよかった。」「いろいろな人が美術館を支えていることを知り、驚いた。」「美術は難しいというイメージがあったが、実際話を聞きながら見ると、とてもおもしろかった。」「また、「自分の作品を美術館にかざってもらえるよう頑張りたい。」「という方もあり、中学生の希望あふれるナイストライになりました。(F.Y)



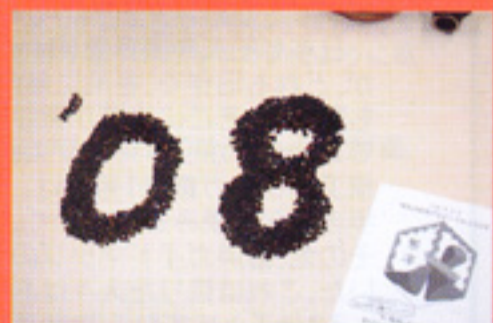
CAMKオリジナルタペストリーが衣替えをしました 2008.9.13

当館布絵本ボランティアチームが制作中のキッズサロンに設置されている四季のタペストリーが、夏から秋へと衣替えされました。秋の森には、真っ赤な紅葉や黄色の銀杏、トンボや小鳥などのパーツがたくさん。キッズサロンに足早く秋が訪れました。キッズサロンで遊んでいた子どもたちも興味津々でパーツの付け替えのお手伝いをしてくれました。次の衣替えは12月、冬の装いのタペストリーも楽しみです！(S.Y)



明後日朝顔、種とり&種配布を行いました 2008.10.11

残暑が長く続き、ようやく朝夕が涼しくなり始めた10月11日、明後日朝顔プロジェクト2008の第1回種とり収穫祭を行いました。朝顔のクマ型ドーム制作のときから携わってくださっているボランティアスタッフと共に、命の花壇に上がり込み、ようやくできた種を手で摘み取りました。収穫高1,500粒。「種の取り扱い」と書かれた紙で葉のように包まれ、300個の種セットができました。その種は、別の誰かの手で育てられて次につながるために、当館6周年記念の日の来館者へ配布しました。受け取った人たちは、来春に日比野克彦が提唱する「明後日朝顔の7つの気持ち」を感じながら朝顔を育てることになります。包みの中には、朝顔の種とは別に、子を送りだす親のような気持ちや、春が待ち遠しくなる待望感が含まれているようなお話ししました。(M.H)



開館6周年記念日講演会 後小路雅弘「美術と美術館をめぐる大切なこと -あるいは、アジア美術の愛し方」 2008.10.12

「美術と美術館をめぐる大切なこと -あるいは、アジア美術の愛し方」と題して、九州大学大学院教授の後小路雅弘氏による開館6周年記念日講演会が行われました。後小路氏は、福岡市美術館学芸員として30年前からアジアの近現代美術に関わり、また学芸課長として福岡アジア美術館の開館を手がけました。アジア美術との出会いや、リキシャ・ペインティング、福岡アジア美術館トリエンナーレなど多岐に渡るお話しは、長くアジア美術に関わり続けた経験がもとになっており、とても興味深いものでした。欧米の美術より知名度も低く軽視されがちだったアジア美術の側からの視点だからこそ、見えてくることの数々。また、注目されていなかったものを取り上げていくことも美術館の使命ではないか、との提言を通し、美術や美術館をめぐる既存の価値観の再考も促されました。東と西の出会いは高級なもののみではなく、お土産的なもの、「美術」という枠組みから外れているものにこそ現われてくる、という言葉になるほどと思ったり、アジア美術やアジア文化をめぐる様々な写真に見入ったりと充実した時間となりました。(M.F)



「荒木経惟 熊本ララバイ」展覧会記念講演会 宮下規久朗「日本ヌード美術史～春画からアラキーまで～」 2008.11.2

「荒木経惟 熊本ララバイ」展覧会記念講演会として、神戸大学大学院准教授の宮下氏をお招きして、日本ヌード美術史をテーマに講演会を開催いたしました。これまで美術史的観点から焦点をあてられることが少なかった、日本の裸体文化と裸体表現の変遷、西欧から流入したヌードの概念が日本において、いかに受容されてきたのかをユーモア交えながらお話いただきました。講演では、当館が所蔵する生人形にも触れられ、風俗としての裸体と芸術としてのヌードの狭間で衰退していった文化にも光があてられました。アラキーの写真については、「私写真」のコンセプトに加え、浮世絵との関連についても取り上げられ、アラキーの写真が日本美術の系譜につながることを改めて強く認識する機会となりました。また、宮下氏がかつて学芸員として勤務していた東京都現代美術館の開館記念展でアラキーの写真を担当した折の秘話も会場で伺えました。(A.A)



ミュージック・ウェーブ No006 上田愛 ピアノ&ギター弾き語り 2008.8.23

上野愛さんによるピアノ・ギター弾き語りコンサートが行われました。熊本県山都町出身の上田さんは高校を卒業したばかりの19歳。パワーあふれる歌唱力とピアノ&ギターの弾き語りでアップテンポのナンバーから故郷を思わせるバラードまで豊かなバリエーションで演奏してくださいました。イベント当日の8月23日が誕生日のお客さんにオリジナルCDプレゼントといううれしいハプニングもあり、約40分間のステージ、会場を魅了してくださいました。(M.O)



ミュージック・ウェーブ No007 アレーズ サクソフォン・アンサンブル 2008.9.13

アレーズ・サクソフォンアンサンブルの演奏を行いました。アレーズの皆さんは熊本出身のアマチュアサクソフォンアンサンブルのグループです。アマチュアといえども2007年2月九州アンサンブルコンテスト一般の部において金賞を受賞するほどの実力の持ち主。本日の演奏では、バッハ、ドビュッシーから、西洋とアフリカを融合させたジャズ組曲「ウォリーウォーク」、ジャズとクラシックの要素を取り入れたタンゴ曲「天使の詩」など9曲を演奏してくださいました。生演奏ならではの音の響きと息のあったサクソの四重奏がたえず心地よい時間を紡ぎだしていました。(M.O)



ミュージック・ウェーブ No008 じんべえ フォーク・デュオ 2008.10.4

じんべえのみなさんによるフォーク・デュオの演奏を行いました。美術館と僕たちの音楽の雰囲気がかぶるかなと心配していたメンバーのみなさんでしたが、いざ始まると、時に明るく時にセンチメンタルなオリジナルの楽曲で、お客さんのハートをわしづかみ。ノリのいい音楽と手拍子で一体感が生まれとても楽しいステージになりました。(M.O)



ミュージックウェーブ No009 STREET ART-PLEX共催事業 ショパンメモリアルコンサート 2008.10.18

美術館のイベントとしておなじみになってきた、ストリートアートプレックスとの共催事業。今回は、7月に実施したバッハに続き、偉大な作曲家の命日に行われるメモリアルコンサートシリーズ第2弾として、ショパンのコンサートを開催しました。中学2年生から大人まで、9名の奏でる美しいショパンの調べ。そして特別ゲストとしてリサイタルの合間に駆けつけて下さったプロのピアニスト、諸田由里子さんの優しいピアノの音色に、訪れた200名以上の来場者は身じろぎもせず聞き入っていました。当日はストリートアートプレックスの一年の総集編として、美術館のコンサートも含めた中心商店街の7箇所でのイベント「エクストラヴァガンザ」が開催されました。クラシック、ジャズ、アフリカンから演劇まで、様々な表現活動で街のにぎわいを創出するこの事業に、これからも積極的に参加していきたいと思っています。(C.I)



ミュージックウェーブ No010 CAMK秋のピアノコンサート 2008.10.25

ピアノボランティアさんによる秋のピアノコンサートが開催されました。今回で6回目になるこのコンサート。今回は15名のボランティアの方が出演してくださいました。自作の曲から、クラシック、映画音楽、ゲーム音楽など、幅広いジャンルで会場を豊かな音色で楽しませてくださいました。(M.O)



八朔祭、審査に行ってきました 2008.9.7

バスが深い山を抜けると、突然開けた街に出る。それが矢部として知られてきた山都町。街はずれの谷間には、石を組んだ壮麗な通潤橋があり有名である。ここで江戸中期以来毎夏行われている八朔祭を訪れた。祭りの目玉である「大造り物」の審査が目的である。八朔祭では毎年町内が組単位となって「大造り物」を造りあげ、腕を競い合う。それはスケールが大きく、歴史があるだけにさすがにしっかりとした造形で、予想を越えて立派なものであった。その造りものは長さが7.8メートルに及び、高さは道路に架かる電線を超えるので、街を引き回す時はサスマタでそれを押し上げながら進む。そして矢部伝統の三味線のおはやしが続ぎ、祭りは盛り上がっていく。造り物は竹や杉、シュロの皮など自然の材料を使い、それを収集し完成までに数ヶ月かける。そして祭りの時が最も旬であるようタイミング良く制作されている。夏の光を受けて、竹の切り口や集められた緑の葉が輝いているのが印象的であった。この造り物は賞味期限のある生き物であり、歴史が集積するこの街で、しかも人口の数倍の観光客が訪れる祭りの時が頂点にある。しかしその造形性、制作エネルギー、使用される豊かな素材は、一回だけのイベントではもったいない。輸送や設置の問題はあるが、熊本市や空港などで見せることができれば、人々を驚嘆させるに違いないと思われた。(T.S)



GIII vol.57 現代の書ー三嶋天鴻・徳田翠雨・緒方龍生 三人展 2008.9.3-10.25

「現代の書ー三嶋天鴻・徳田翠雨・緒方龍生 三人展」が開催されました。熊本で活躍する書家三人によるこの展覧会。少字書に多字書、墨絵風の作品、端正なものに軽妙洒落なもの、そして勇壮なものなど、様々な作品が展示されました。三者三様の表現をとって作品のなかにあらわれるのは、現代においていかに書に取り組むかという問いへの探求。紙と墨による造形への果敢な挑戦の根底に、テキストへの深い理解と先人の書を受け止め向き合っていく真摯な姿勢を感じました。会期中9月6日には出品作家三人をお迎えしてアーティスト・トークも開催。たくさんの方が展覧会場を訪れ、書の多様な世界を楽しんでいました。(M.F)



GIII vol.58 盆栽という名の宇宙vol.5 2008.10.30-11.3

今年で5回目となる「盆栽という名の宇宙Vol.5 日本盆栽協会熊本支部銘品展」が開催され、会場内には日本盆栽協会熊本支部の皆さんが丹精込めて育てた銘品31席が並びました。色付いた葉や鈴生りの実からは豊かな秋の気配が感じられ、この盆栽展の時期にしか見ることのできない、生き物の穏やかな雰囲気に包まれた展示空間となりました。(S.Y)



ART de Gyan!

【アート・ド・ギャン】
熊本市で「アート・ド・ギャン」の展です。

熊本市市民美術展 「コラボレーターの会」第10回作品展

2008.8.27-9.2 鶴屋百貨店東館8階ふれあいギャラリー
熊本市手取本町6-1 TEL 356-2111

熊本市市民美術展熊本アートパレードを毎年応援して下さるボランティアグループ、コラボレーターの会による10回目の作品展。今年は、新しい会員も増え、一段と賑やかな展覧会となっていた。それぞれに意欲的に活動されており、新しい画題やジャンルに挑戦された方も多かったようだ。

第10回熊本市市民美術展熊本アートパレードは、2009年2月28日(土)～3月15日(日)です。テーマは、すっごい正直(でなければ、すっごいウソ)。審査員は会田誠氏。詳しくは、応募要項をご覧ください。(N.I)



第36回 熊本県書道連盟展

2008.9.17-9.21 熊本県立美術館本館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

県下で一番大きな書道団体である書道連盟展が県立美術館本館で開催された。連盟会員219人が漢字、かな、近代詩文書、少字数書、篆刻、墨象の7部門で、それぞれに個性を競っていた。特に漢字の出品が多く、大作もあり、多彩であった。一般会員115人から優秀な作品31点を選出して奨励賞がおくられた。

今回は特別展として「近代書人の書」が展示されていた。手島右卿、上田桑鳩、宇野雪村、村上三島、北村九郎、西谷卯木、内田鶴雲、宮本竹蓮、天石東郎、松永鶴雲、山崎大抱(2点)、木村知石、劉蒼居(2点)の15点である。近代日本の代表的な書家だけあって作品は会場に光っていた。(S.K)



陶工・井上泰秋が描く 「心の詩人 坂村真民の世界展」

2008.10.1-10.10
熊本市手取本町3-8有明ビル TEL 326-3040

荒尾市生まれ玉名市で育った詩人坂村真民の詩を、同じく荒尾市出身の陶工井上泰秋さんが描いた作品展。「念ずれば花ひらく」などの随筆集で知られる坂村さんの詩約20点が展示されていたが、詩のモチーフを描きこみながら丁寧に書かれていて、井上さんの坂村さんに対する思いが伝わってきた。陶工としての井上さんとは違う一面を見ることができた展覧会だった。(E.Z)



松永安正展 El viento de España

2008.10.28-11.2 ギャラリーカフェ トト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F TEL 096-352-7162

福岡県出身の画家松永安正さんの個展。スペインの風景を題材とした作品約20点が並び、繊細で達者な筆致の水彩画から、筆触をいかした抽象的な味わいのある油彩画まで、様々な作品を楽しめる。

全体を通して印象的であったのは色彩だ。特に油彩画における白ないし白に近い色の配色が絶妙で、スペイン、とりわけ地中海性気候地域のスペインの乾いた大気と風土を感じさせる。空の描写も興味深い。松永さんによれば、地中海沿いの地域の空は様々な色彩を持っており、それを表現したかったとのこと。今回展示された作品は2008年の2-3月、浅い春を描いたものが中心だそうだ。副題の通り、「スペインの風(El viento de España)」を思わせる展示であった。(M.F)



乙葉統先生作品(1917~1983)と曾田豊子展

2008.10.3-10.13 島田美術館
熊本市島崎4-5-28 TEL 096-352-4597

海老原喜之助門下生でもあり、熊本学園大学で教鞭をとった乙葉統さんの作品と、学園大(前熊本短大)の美術教養コースで第1期生として乙葉さんに学び、現在も学園大の美術準備室に勤務される曾田豊子さんの展覧会。

乙葉統さんの作品は、学園大所蔵のものや、曾田さんが管理されてきた作品や資料を展示。軽やかなデザインを絵付けした皿など、興味深い小品も並んだ。曾田さんご本人の展覧会としては、美術家連盟展や、熊日総合展には出品してきたものの、実に23年ぶりに行ったとのこと。さわやかに透きとおる秋の青空のようなブルーと、温かみのあるオレンジが使われた抽象のコンポジションが描かれている。ずっと長く、白・黒・茶・灰色の時代が続いていたそうだが、今年は特に明るい色彩へと画風が変化しているとのこと。今回はやや小さめのサイズの作品が並んでいたが、改めて他の作品もじっくり拝見したいと感じた作品であった。(H.T)



岩崎千江子展 ー自然からのメッセージー

2008.9.30-10.5 ギャラリーカフェ トト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F TEL 096-352-7162

「自然の恵み」をテーマに台所でお馴染みの玉ねぎやピーマン、さつまいも、スイカなどをモチーフにした由彩20点を発表。群馬県出身の岩崎さんは、今までは風景を中心に制作されていた。しかし、いつも見ている野菜の色や形の面白さに気づき、その素材を半抽象・半具象的にパステル調で描くことに夢中になったという。伸びやかなタッチでみずみずしく描かれている素材たちはとても可愛らしい。描いていると日頃のわずらわしさなんて忘れてしまいます。とおっしゃる岩崎さんの言葉の通り、見ているとこちらまで元気になってしまう。これからは故郷を見たままではなく心豊かに描いていきたいということだ。自分の世界感を楽しく表現して嶋る岩 さんの今後の展開が期待される。(C.T)



上野豊 個展

2008.10.15-10.19 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

今回の上野豊さんの個展では、1997年から2008年の11年間に亘り九州各地を飛び回って描かれた水彩、油彩の風景画の中から37点が展示された。上野さんは、おびただしい数の作品を実際にその場所に向いて描くことを何十年も続けている。素早い筆跡から、その場所ではか得られない空気と一瞬の時の輝きを描くことに没頭し、意識の高さと集中力が感じられる作品である。水や空気は止まっていると淀むから、常に動いているように描くんだよ、と語る上野さん。描かれたのはまさに瑞々しい九州の自然であり、そこに生きる人々や生物の息遣いが聞こえてくるようである。温かい人柄で多くの人から愛されている上野さん、これからのますますの活躍を期待している。(M.O)



第12回 独立書人団熊本支部書展

2008.10.28-11.3 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

独立書人団の熊本支部に九州独立選抜書展が併催されていた。漢字と少字数書に近代詩文書で81人が一点ずつ出品。少字数書が大半をしめ、元気一杯で個性的な表現を楽しませる会場となっていた。徳永果鶴さんは一字で「養」を長鋒の用筆のうまさを見せていた。中村太陽さんは「回生」を3×6尺の全紙に、金文書体で、はげしく回転する筆さばきでダイナミックに書いていた。前川祐子さんは夏目漱石の詩二題を行草書でリズムよく、変化のある筆さばきで112字をうまくまとめていた。大森澄子さんは2×8尺のたて額に濃墨で潤滑のきいた変化のある書になっていた。右山澄子さんは超濃墨で扁額「山行」を余白をうまく生かした作となっていた。河内東壁さんの「遠」一字は、淡墨をうまく生かして力強く書いていた。(S.K)



くまもとの木工房展 8th

2008.10.21-10.26 熊本伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35 TEL 096-324-4930

熊本県内の木工芸家7名による木工芸展。会場内には、椅子やテーブルなどの大きな家具から、食器や台所用品、おもちゃやインテリアグッズまでそれぞれの作家の個性が感じられる木で作られた様々な作品が並んでいた。木工芸の伝統的な美しさを感じさせる上品な盆や皿、手になじむ形や質感が印象的な不思議な形の木のストラップ、または、遊び心溢れるマッチ箱に入った香りを楽しむためのヒノキの棒など、それらはどれも様式は異なるが木工芸品のある豊かな生活を想像させる暖かい雰囲気満ちていた。会場を訪れた人々は、皆お気に入りの一品に手を伸ばし、その感触を愛しむようにゆっくりと作品との時間を楽しんでいた。(S.Y)

WORLD NEWS

「街じゅうアートin 北九州2008 ARTS×TECHNOLOGY」

2008.9.6-9.28

特定非営利活動法人(NPO法人)創を考える会・北九州主催で行われた展覧会。作品は、リバーウォーク北九州、小倉井筒屋、コレット井筒屋ほかに展示された。出品作家は、当館収蔵作家の阿部守や、「ピクニックあるいは回遊展」出品作家の鈴木淳など9名。彼らの作品の制作協賛に参加しているのは、TOTOなど北九州にゆかりの深い企業9社で、作家の作品素材を提供している。

印象的だったのは、店舗や公共区域の対応の柔軟さである。

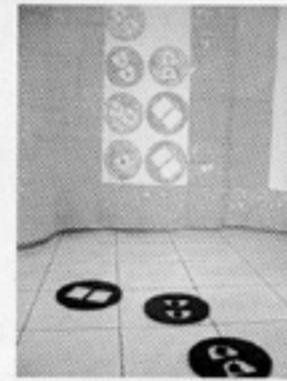
鈴木淳においては「私はここでみていた、これからずっとずっと」という作品において、老舗の高級デパート小倉井筒屋の外壁に、目がぱっちり見開いた顔を描いた。小倉城のとなり老舗としてそびえ立つ歴史もふまえ、ずっと北九州の人々に愛されるデパートであり続けているという自負を感じさせる、大変ユーモアのある作品である。

須藤玲子においては、「SCRAPYARD」という作品、これは、白い大きな布に、金属部品パーツを錆び染めさせ、装飾文様のように表現する大変エレガントな作品を出品している。こちらは、コレット井筒屋の1階正面玄関のエントランスに展示されている。駅前デパートの顔となる入口に作品展示許可を獲得しているということ自体が、北九州に現代美術が確実に根付いており、しかも若い作家たちを応援しようという姿勢があることを感じさせる。

もうひとつ印象的だったのは、この展覧会の出品作家のインタビューが、リバーウォーク北九州壁面の大きな液晶モニターを通して放映されていたことである。作品展示までは足を運ばなくとも、展覧会が開催されていることが市民にひろく周知されていた。フリーランス・キュレイター一花田伸一氏の豊かな経験値やネットワーク、細やかな心遣いがちりばめられた展覧会であった。(H.T)



阿部守(奥き舟)
展示場所:小倉城歴史の湯



須藤玲子(SCRAPYARD)
展示場所:コレット井筒屋1F
正倉玄閣エレベーターホール

「横浜トリエンナーレ2008 タイムクレヴァス」

2008.9.13-11.30

今年で3回目となる横浜トリエンナーレ。メイン会場は新港ピア、日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)、横浜赤レンガ倉庫1号館、そのほか4つの会場で開催された。

いわゆる国際美術展という会場は新港ピアで、サウンドインスタレーションの作品や、映像作品など、それぞれ小部屋をめくりながら見るかたちであった。こちらはいわゆる超有名アーティストの出品はなく、先入観なしにそれぞれの作品をじっくりみてまわる観客が多かった。印象的だったのが、ペドロ・レイエスPedro Reyesの《Baby Marx》で、20世紀の英雄(レーニン、チェ・ゲバラ、毛沢東など)を人形劇のパペットとして登場させ、20世紀的なイデオロギーの衝突をコミカルに描いていた。この作品は、私にとってむしろ、いち早く20世紀の英雄を作品に取り上げた森村泰昌の先駆的な銅眼を想起させるものでもあった。

日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)では、いわゆるスーパースター、オノ・ヨーコやマリナー・アブラモヴィッチ、マシュー・バーニー、ポール・マッカーシーなどの作品が出品されていたが、どれも旧作で、名前に魅かれてきた者にとっては若干物足りない感があった。勅使川原三郎の作品《時間の断片 Fragments of Time》は、細い袋小路の3面の壁に割れたガラスが突き刺さり、床にも敷かれ、そこに光量が微妙に変化しつづける照明とサウンドのインスタレーションで、展覧会初日にはそこでダンスが行われたようである。非常に美しい作品で、かつてコンテンポラリーダンスとしてみた時の勅使川原の舞台の洗練を思い出した。

横浜赤レンガ倉庫1号館は、ミランダ・ジュライの《廊下》が人気であった。一度に5人程度の人数制限が設けられており、細い廊下の両壁に設置されたテキストパネルを歩きながら読み進めていく。メッセージはあるようなないような内容で、時々くすりと笑わせるユーモアある小話のような親密な空気の漂う作品であった。その他、音声ガイドマップの仕上がりが非常によく、出品作家それぞれの声で作品解説が行われていた。これは作品に観る者をさらに一歩近づけるものとして作用していた。これは借りた人々はお得感を感じたと思う。

30分ごとにまわる無料巡回バスの使用者が多かったのと、みなとみらいエリアの工事用の柵となるパネルに方向案内の矢印を効果的に記してあり、次の会場に向かいやすかったのも、鑑賞者も主催者もさすが3回目というだけの振る舞いを感じさせ、非常に好印象であった。(H.T)



チョクミンソクヒジヨセフクヤマ&ストアフロント・チーム
(リングドーム)中庭東側パーク

アジアの現代美術展

2008年はアジアの現代美術展の年であり、韓国の光州、釜山、台湾の台北、中国の上海、広州、シンガポールで開催されているが、今回はそのうち二つの展覧会を取り上げたい。

台北ビエンナーレ(2008.9.13-2009.1.4)台北市美術館

今回の展覧会は、Manray Hsu(徐文瑞、ドイツ、台湾)、Vasif Kortun(ワースフ・コルトゥン、トルコ)の企画であり、グローバル化が進む現代の都市生活において、私たちの政治的、文化的立場との距離を浮き彫りにさせる作品が集められていた。

スロヴェニアを活動拠点とするアーティスト・グループInwinは、《NSK/パスポート所持者》と題し、人種主義的な国家に変わる、領土をもたない自由な概念のNSK国家を設立し、希望者は市民権、パスポートを得ることができるというプロジェクト型の作品を出品した。パスポートを申請することができる手続きとあわせて、パスポート保持者が国境を越える際に体験したエピソードが映像で流される。ビザ問題など、国家間の関係性や世界の構造が明確化され、国家と統制される個人の枠組みについて一考させるものであった。

またイタリア人アーティストのマリオ・リッツィによる映像作品《チキンスープ》も、台湾にすむインドネシアやベトナムの外国人妻の事例によって、その伝統や文化をわれわれがどの立場から眺めているのかを自覚させる作品であった。

第3回広州トリエンナーレ(2008.9.6-11.16)広州

サラット・マハラジャらによるテーマは「Farewell to Post-Colonialism」(ポスト・植民地主義との決別)とされ、170人のアーティストによる作品が展示された。進行中のプロジェクト、思考の部屋などのテーマが設けられ、さまざまな視点やリアリティを追究し、自己の存在を社会との関わりにおいて捉えようとする表現が印象的であった。

Gao Shiqiang (高世強)は、ラジオを聴いて言葉を覚えたという縁者のストーリーを、映像と写真で構成した。広い大地で、外の世界とのつながりであるラジオを片時も離さず、そこに心を写われている男性、遠く離れて佇む女性。自分の身体と心の居場所はどこなのか、改めてわが身を問う、情感あふれ、詩情をたたえた作品であった。(Y.H)

編集後記

今年も残すところあとわずかとなりました。アラキーの展覧会も、その作品の量と質を目にするごとに感動する毎日です。なにより感慨深かったのは、《母子像》の赤ちゃんがすくすくと育っていること。開会式ではアノヨがはじまっていたり、バタバタ走り回るのをお母さんが追いかける姿も見ました。アラキーは、被写体のその時その時における生命のきらめきの一瞬を、写真を通して残してくる存在なんだなあとしみじみしました。半年で大きく成長した赤ちゃんたちの姿をみて、そのことをより一層強く感じました。編集長 富澤治子

街はクリスマスのイルミネーションが輝き、心躍るとともに、また1年が過ぎようとしているのをしみじみと感じる今日この頃です。美術館では先日から荒木経惟展がオープンし、初日のアーティスト・トークは会場が人で埋まるほどの熱狂ぶり。荒木さんの人気を改めて知ることになりました。寒さなんか吹っ飛ばしてしまうほどの熱いアラキーの人生、そして写真たちにぜひ会いに来てくださいな。担当 大岩みゆき

執筆者一覧

兼城高山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
板井 武
Takeshi Sakurai(熊本市現代美術館館長)
本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館主任学芸員)
藤原江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)

坂本頼子
Akiko Sakamoto(熊本市現代美術館学芸員)
森田彩美
Aki Ashida(熊本市現代美術館学芸員)
伊豆菜々
Nana Izu(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
大岩みゆき
Miyuki Owa(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

藤本貞帆
Maho Fujimoto(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
岩崎千夏
Chika Iwasaki(熊本市現代美術館主査)
橋本真紀子
Makiko Hashimoto(熊本市現代美術館主事)
山下史恵
Fumie Yamashita(熊本市現代美術館総務アシスタント)

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します。

◇メモリア 一まなざしの軌跡展

・正直、お金を払う際は高い！なんて思っていたのですが、実際展覧会を見てみると、とても充実した内容で、わからない点は説明もしてくれ、非常に来た甲斐があった。(27歳、女性、熊本市内)

・イヴォンヌ・リー・シュルツさんのシャンデリアの作品がとてもおもしろかったです。美しいだけでなく鋭く、それでいて女性的感性にあふれていたと思います。係員さんに作品の見方を丁寧に教えて頂き、さらに楽しくみる事が出来ました。(21歳、女性、熊本市内)

・各作品、作者についての解説シートは役に立ちました。いずれの作品もジワーっと面白さが湧いてきました。須田さんの作品の優しさとユーモアが好きです。カンティダ・ヘファーさんの図書館シリーズはもっと見たいという気持ちになりました。(50歳、女性、熊本市内)

・テーマがむずかしく作家の方々のコメントもとても思想的に深い所を語られていたので理解するのが難しい印象を与えてしまうような気もしました。個人的には関心のあるテーマだったのでじっくりと味わわせて頂きました。(33歳、女性、熊本県)

・どうい作品があるのか楽しみにしてきました。砂の模様の作品が最後にあつて、心地よい気持ちで観終えることができました。(49歳、女性、熊本市内)

・作品点数が少なかつたけれども、そのために1つ1つの作品がとても記憶に残りやすいものになった。来てよかったとても思えるような展覧会だったと思う。(21歳、女性、福岡県)

・いろいろな素材で作品が作られているのに感心した。砂の作品は神秘的でよかった。自分なりに何か作ってみたいと思う。(59歳、男性、愛媛県)

・砂のアートがとてもすばらしく感動した。蓮の花を布(服?)で表現してある所がとても良かった。キレイだった。(13歳、男性、熊本県)

・「そこにある花」で作品が全て木でできているとは思えないようなきれいな花で小さな芽のような物が初めはわからなかつたけれど見てみるときれいでさすがにも面白かったです。マリエッラ・モスラーさんの作品「巨大な砂」がとてもすくすくよかったです。(10歳、女性、熊本市)

・極めて興味深い展示でした。私の記憶に対する考え方にも、多にインスピレーションを頂きました。大博覧会から次へと上手く連結していたが、全体から考えると、博覧会の展示はやや異なっていたように感じました。(41歳、男性、宮崎県)

・見る人に親切な作りとオリジナリティーが良かったと思います。作家の音が聞けたのはうれしい。(31歳、男性、福岡県)

◇館全体について

・特によかった点は、説明する方々が丁寧に教えて下さったので知りたいことがよくわかったこと。改善すべき点は、チケットを買う場所が窓口なのか案内口なのか書いてあればと思ったこと。(27歳、女性、熊本市内)

・レストランが好きです。久しぶりに来たからかわらぬ接客のかんじのよさでした。1日ゆっくりできるところがよいです。(34歳、女性、福岡県)

・子供が小さいので館内の授乳室、ボールプール(木のプール)をよく利用しています。人が少なくゆっくりできるのでつづらげます。(32歳、女性、熊本市)

・とてもいい雰囲気よかったです。湿度も快適よかったです。(14歳、男性、北海道)

お知らせ

キッズサロンの金魚、撤去しました

開館展「ATTITUDE2002」にて、来館者のみなさまに制作を手伝っていただいた、金魚のかざりをキッズサロンに展示してきましたが、5年の経過ということもあり、痛みもはげしくなりましたので、撤去いたしました。今後、またあらたに作品などをご紹介する場所として、キッズサロンの木のプールの上は活用していく予定です。(H.T)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.40
2008年12月発行(冬号) ●無料●
●発行人/板井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩 みゆき
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/コロニー印刷
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892